

第25号

アクトス

文芸集団 ACTOS
平成二十七年二月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしずく

石川希理

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験を必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがって、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」「心に響く」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型（詩・短歌・俳句・川柳など）、散文（小説・随筆・児童文学・紀行・評論など）のすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力、援助を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス代表・編集長 大西 玄



目次

エッセイいろいろ 6

ハイパーテキストメイクアップランゲージ 石川希理 6

「私、ブログ書いてます」 明花 9

ドア、自動開閉 明花 12

おせち料理の合間に 明花 13

「僕のラーメン」 胃弱亭骨人 14

フー 小野村 新 17

或る高齢者の日記 高阪博一 22

「俳句」紅葉降る 彩 華 29

阿倍野友之・石川希理対談 描写に説明と公募 30

「詩」幸せ方程式 大西 隆史 42

「童話」オレとスライム 石川希理 45

編集室から 61

ハイパーテキスト

メイクアップランゲージ

石川希理

私はホームページを二つ管理している。

一つは「にんじんじん」のHPである。にんじんじんというのは、長編童話のタイトルで昔、夢中で書き綴ったものである。その名前でHPを開設したのは一九九九年。つまり前世紀のことだ。(笑)

途中の中断もあつたが、現在も続いている。

このエッセイのタイトル「ハイパーテキストメイクアップランゲ

ージ」は頭文字をとってHTMLという。これはHPを書くための簡易言語のことで、一時は参考書片手にHPを作ったこともあつた。現在はホームページビルダーというソフトを使っている。HTMLはどんどん進化して、スタイルシートなどという機能なども追加されたが、私の場合は初歩的なままである。ビルダーも古いバージョンのママ。しかし、表示で文字のサイズが「中」ならばまず問題なく閲覧できると思う。

このホームページの「残日録」という随筆集は、私の創作のまとめであり、日常の思うことで

あり、なにより文章の勉強でもある。

七〇〇回を超えているから、「よくまあ書いてきたものだ」と自分でも呆れている。

残日録はほぼ毎週一回更新しているが、これを読んで下さる方もある。勝手な物言いを讀んで頂けるのは大変嬉しいし感謝したい。論文みたいなものもあるので「工夫が必要かな?」とも考える。が、まあ思いつくまま気の向くままが一番良いだろう。プロフィールなどは創作歴だけである。詩や小説や短歌なども、最近はアップしていない。いちいち面倒ということより、少し

手が回らない。

二つ目は「文芸集団アクトス」のHPである。

これはアクトスの全号と増刊号をPDFであげている。

PDFというのは、アドビという会社の作ったソフトである。

パソコンやネット上では様々なファイル形式が氾濫している。例えばワードファイルは、ワード

というソフトがないと開けないし読めない。またある時間以上たつた古いワード形式のものは新しいワードでは読めない。逆もある。一太郎ファイルは一太郎というソフトがないと読めない。画像なども様々である。

そこでアドビという会社が、どのパソコンでも読むことが出来るようにした形式がPDFである。

これを読むソフトは無料で提供されている。PDFは一種の画像ファイルだから、編集するためのソフトは別に売られている。しかし開いて読んで印刷出来ればいいので普通は無料ソフトで十分である。

どのような環境でも読めるというのは大変有り難く、世界中でこのPDFファイルが使われている。大学の論文などはほとんどこれで公開されている。

私の使っている一太郎というソフトには作ったファイルをPD

Fにする機能がある。それで「アクトスHP」に各号などをあげている。

一方、「にんじんじん」のHPのほうは、マイナーな一太郎というソフトの形式のママである。PDFにするのは手間がかかるし、一種の画像なので簡単に変更編集できない。それで使い慣れた一太郎ファイルのママである。

一九八〇年代、まだ日本に世界標準のMS-DOS（マイクロソフト・ディスクオペレーションシステム）が入っていない時代である。ワードもエクセルもなかった。NECでパソコンを買うと、

なんとおまけで「一太郎」のコピーをつけてくれた。現在なら著作権侵害で大問題になっただろう。それからのユーザーである。

ワードは横文字の英語を扱うものが進化したので、初めから日本語の縦書きを意識していた一太郎とだいぶ仕様が異なる。それで私はいまでも一太郎を使っている。

ワードも役所や大学で使ったが、歳のせいもあつてなじめない。佛教大学に六十五歳で入学したが、一太郎ファイルでレポートが出せて助かった。教育関係や行政では一太郎を使用しているところもまだ相当あるらしい。

しい。

この一太郎も、どのパソコンでも読め・印刷できるようにビュワーが無料で提供されている。HPの中に提供先にリンクを張つてある。

さて、アクトスのHPには、「掲示板」がある。

例会（合評会）などの報告、作品の感想など、全員に必ず知らせなくてもいい事柄はここにアップする。

会員からの書き込みも時折あつて楽しみにしている。

掲示板に書き込みがあると、メールで連絡が届くから、パソコンを起動している限り早く判

る。

掲示板をクリックして出てくる画面上の、書き込み枠の最下段に、「ケータイで使う」[BBS ティッカー]「書込み通知」[検索]と横並びの文字があるが「書込み通知」をクリックして設定する。

掲示板を使わずにメールの一斉通知という手もあるが、それだと会員だけになってしまう。HPというのは大きく言えば世界中に開かれているわけで、アクトスの同人でも読書会員でもないが、HPを覗いて下さる人も、また相互にも意見とか連絡を表明出来る。

もちろん掲示板をパスワードで限定した人にしか見せないことも出来る。いまのところ、「荒し」もないのでそのままである。

便利な世の中になったものだとつくづくと思う。

このアクトスのHPは、各号毎に更新する。また掲示板は時折覗いたり書き込んだりしている。

最近は簡単にブログなどが開設出来る。

「HPから変更しようか」と考えないこともないが、その簡単なブログをなかなかさわる気にならない。とりあえず今のまましばらくはHPと格闘しようと考えている。

「私、ブログ書いてます」

明花

私がブログを始めたのは、二〇一〇年十一月。ちょうど丸四年が過ぎていることになります。きっかけは、当時の職場で隣の席に座られていた「人権推進員」のおじさまが、熱心に勧めてくださったから。私がその職場を任期満了したあと、事務室で心筋梗塞をおこされ亡くなられたこともあり、ご健在なら、今も楽しみに読んでくださっていただろうと思うと、ブログ

は書き続けようかな、と思つています。

四年も続いているという理由は、どうやら、私の脳は入力した情報を、「書く」ことで出力して、頭の中のバランスを取っているようです。人の脳はインプットしたものはアウトプットしないと、オーバーヒートしてしまうのだそうです。中学生の頃から二十六歳で結婚するまで付けていた日記の代わりに、日々の出来事やその場面場面での心模様、備忘録として、アクトスのネタ帳として記録している。そんな感じのブログです。

以前、大西先生がアクトスの

掲示板だったかに、「若い人はブログなどは書くのに……作品はなぜ書かないのだろうか?」というようなご指摘をされていた文章を読み、「ふむふむ」と考えてはみましたが、明確な答えは見つかりません。ブログのほうがお手軽な印象があり、文字数が少なくてもよいような気がしますし、写真なども手軽に利用出来るから文章表現の稚拙な分、映像に助けられているからかもしれません。

私のブログの入力風景を紹介すると、当初はパソコン入力だったので、食卓で夕食終わりにテレビを観ながら、打ち始め

るという感じでした。まずデジタルカメラのSDカードのデータをパソコンに読み込んで、書き始めるという手順です。カバンの中にはいつもカメラが入っており、一昔前の「女子高生並み」だったのも今は昔。

今やスマートフォンで「写メ」つて、移動中や待ち時間に入力することも。手持ち無沙汰なとき、テレビを観ながら、ゴロンと寝ながら入力してしまう、そんな入力風景です。

書く材料は「美味しい」とか「きれい」とか心が揺れたら、対象物があれば、まずシャッターを押してしまいます。いわゆる

「ブログネタ」と呼ばれる、美味しいお料理や風景などです。自分の手料理などを紹介するとき用に、写真写りが良いように何種類かのランチョンマットを準備しています。このあたりは元編集者としての経験のこだわりかもしれません。で、写真をみながら何に感動したのか、感動した何かを伝えるように書いていきます。「ねえ、見て見て」とか「こんな面白いことがあったのよ」とか、そんな気分楽しく書いていきますが、文章を書く練習という気持ちを持って書いています。

パソコン入力なのか、スマホ入

力なので随分文章量が違います。スマホの場合は、携帯画面に見える文字数も少なく、私の文字サイズの設定では十八文字程度。ワンセンテンス三行から四行で、段落をかける代わりに一行行間をあけます。画面上読みやすいからです。パソコンだと結構長文になります。画面が大きいこと、キーボードの方が入力しやすいので、饒舌に語ってしまう感じになります。

書き出しは、けつこうスムーズですが、終わり方がすっきりいかないと、モンモンと文章をストックしてしまうこともあります。結局文章をアップせずに終わる

こともあり、タイムリーな話題の時は、タイミングを外すと投稿することはありません。

もつとも悩むのはタイトルで、文章を書き終えてからタイトルを考えることが多くなります。自分の記録としては、タイトルをみて書いてある内容が分かるようにしたいのですが、ブログの読者数を上げる事を意識して、検索してもらいやすい言葉を入れたり、興味を持つてもらえそうなタイトルを考えることがあります。そのほうがアクセス数が増えるからです。

アクセス数というのは、何人の人が何時頃に私のブログを読ん

でいるのかが、毎日分かる仕組みになつていくのです。人様に読んでもらうような内容のあるブログではないのですが、多い時は百五十を上回るアクセスがあり、びつくりします。例えば十一月で一番アクセス数の多い日のワードは「たい焼き」と「羊のマフラ―」でした。時節柄とか、世の中で話題になつた言葉が入っているとアクセス数が跳ね上がります。知らない人なのにインターネット上で繋がっているという、これぞSNSという感じがします。

「ブログ書いてる」とアナウンスした友人が読んでくれていたり、

知らない人でも読者登録をしてくださって読んでくださっている人もいて、いつしか「アクセス数、百人は上回りたい」とか、ちよつぱり変な色気が出てきたりします。初めて百人の数字が出たときには「おお!」という感じでした。

書くことが何もなくあったり、あつても文章にまとまらなかつたり、更新しない日が十日くらい続くと、友人から「どうしたの? 体調悪いの?」と個人的にメールが届いたりするので「読んでくれている人がいるんだ」ということが書く励みになつて、四年も続いているのかもしれない

ん。

そんなこんなで、この号の提出原稿は、ブログ記事を提出することにしました。そのままの文章では、理解出来ないものもあり、加筆訂正をしています。読み直すと主語を入れたほうがわかりやすいとか、表現を変えたほうが雰囲気が変わるなあとか、気がつくことがたくさんありました。

今年はクリスマス前に激しい寒波に見舞われました。お体ご自愛ください。自宅近くで開催されている例会なのに、出席することがなかなか出来なくて残念なのですが、来年もお見捨て

おきなくご指導ください。敬愛するアクトスの同人の皆さまへ。

二〇一四年十一月十四日投稿
「つうちーの雑記帳」より

ドア、自動開閉

明花

たまに乗るJR。西明石駅に入る電車が手動開閉になつて、最初は戸惑つたもののずいぶん慣れてきた。

今日は珍しく、ホームに早く着き、停車中の電車に約10分の発車待ち。何度も何度も「ボタ

ンを押すと開きます」と、アナウンスされる。車体に人が近づくとセンサーが働く模様。

折しも今日は気温が下がり、風が車内に吹き込んで、寒い。私の前のドアは、オープンなまま。手動で開くなら、ボタンを押せば、閉まるはず。気温調整のためのボタンなんやから……。でも機械音痴の私は、自信がまったくない。寒いのに誰も「閉まる」ボタンは押さない。がらーんとした普通電車内。みんな誰かが押すだろうと思っているのか。仕方なくそーっと、ドアまで移動して、やや、キンチョーしながら「閉まる」ボタンを押してみ

た。

「ぶつしゅー」

空気の抜ける音がして、やつぱり、ちゃんと閉まった。

「ドアはボタンで開けたり閉めたりできます」って、アナウンスに変更して欲しいなあ。そしてらみんな寒い時はボタンを押すに違いない。

車内は一気に暖かくなった。



二〇一〇年十二月三十一日投稿「つつちーの雑記帳」より

おせち料理の合間に

明花

大晦日。今年もやつぱりおせち料理を作っている。姑が亡くなる前年まで、作ってくれていたのも、もう七年、私がおじいさんの分も作っている。まだ、七年か……とも、思う。

姑が亡くなつてから毎日夕食作って届けている。でも元日から三日間は、夕食を運ばないですむので、おせちを作っている、のかもしれない。

どうせ時間をかけるなら、美味しく作りたいので、三十日に一度下処理をし火をかけ味を含ませ、三十一日には仕上げる。

さあ、続きをしよう。お正月が来ちゃう。

「めんどろ」って思う。毎年思う。

「僕のラーメン」

胃弱亭骨人

でも、今年はこちらとした変化を、自分の中に発見。仕事で独立して暮している二女が正月に帰ってくるのだ。ちよつとでもホツとしたり、美味しいものを食べさせてやりたいと思う。野菜が大好きで、好き嫌いのない娘なので、あれも、これもと思う。

「青春18切符」を手に、僕は「青春67」の旅に出た。旅と言っても一日約二三〇〇円で乗り放題の切符を有効に使つての日帰り旅である。

客で満席である。昔ならこんな時間帯は車内もガランとしていたものだが、昨今は我々団塊世代を筆頭に結構混み合っている。最早謙虚さを失つてしまった往年の娘達の嬉しいお喋りも、独りで旅する僕には耳障りに感じることさえある。いずれにせよ車社会の今日では、昼間のバスや電車は暇をもて余した元氣な高齢者達の加齢臭が満ち溢れているのである。

私が作る料理がごちそうとは思わなければならない。作る私自身の励みになっていることは確か

目的地も定まらぬまま、とりあえず西へ向かう新快速電車に乗り込んだ。出勤ラッシュも終えているが車内は中高年層の

馴染みの神戸に立ち寄った後、西へ向かう列車の中で、折しも萎えた僕の胃袋に合う昼食はないものかと考えた時、ふとあの「播州ラーメン」がひらめい

た。

若い頃は、旅先でご当地ラーメンなるものを試食するのも一つの楽しみでもあったが、最近はその意欲も消え去った。今は町中に暮らしていても、豚骨や鶏ガラの臭いが染み込んだ店内で歯ごたえの無くなるまで煮込まれた分厚い焼豚がトロツと脂ぎったスープにまみれているようなラーメンなどは口にしたくなくなつた。調子に乗つてそんなラーメンを口にしようものなら胸焼けは夜まで収まらない。最早ラーメンの主流はまったく感を好む若者に凌駕されてしまった。そんな中、僕にとつてのラーメン

は昔ながらの「中華そば」でなくしてはならない。全国的にも名高いご当地ラーメンの多くが巷に氾濫する中で、僕が理想とする「中華そば」は、「高山ラーメン」と「播州ラーメン」である。ご当地ラーメンの幾つかは京都の町中でも口にすることが出来るが、「高山ラーメン」と「播州ラーメン」は今のところ現地に赴かねば口にすることが出来ない。只、「高山ラーメン」は場所柄年に一度位は旅の途中で口にしており、魚介だしの効いた和風スープが旅する僕の胃袋をやさしく満たしてくれる。この高山ラーメンに更に甘味の加わ

つた醤油味が、僕の選ぶご当地ラーメンの最高峰と言える「播州ラーメン」である。地域的には加古川から西脇にかけての一带に散在するラーメンであるが、鶏ガラ、野菜、魚などからとつた独特の甘味のあるスープは、胃弱の僕でさえ最後の一滴まで飲み干してしまう絶品である。ちなみによく似てはいるが、少しくどい感じがするのが「旭川ラーメン」である。

僕が初めて「播州ラーメン」に出会つたのは三〇代半ばの頃であつた。十二月の「西脇マラソン」に参加した帰りに、友人に連れて行かれた加古川の橋のた

もとにある『大橋ラーメン』というさりげない店で、折しもTV中継されていた福岡国際マソンの映像に見とれながら口にしたそのラーメンのあまりの旨さに思わず二杯目を注文したのを覚えている。同じラーメンを二杯食べた経験は後にも先にもこの時だけであつたろう。四〇代になつてようやく自分の車を運転するようになってからは、幾度かその店を訪れたことがある。更に明石により近い小野の町に『らんめん』という、『大橋ラーメン』程ではないが、旨い店を知つてからは機会あるごとによく通つたものである。又、加古川

駅周辺にも旨い店が幾つかあると聞いてはよく出かけたつもりもしたが、いずれの店にも共通しているのは、あの甘くやさしい味であつた。

退職後、京都に移り自分の車を手放してからは、この「播州ラーメン」を口にすることが無かつただけに、今この乗り放題切符を手にした僕は、あの懐かしい味を思い出したのである。迷わず加古川駅で下車し、そのまま加古川線に乗り換えて「滝野」という駅で降りた。そこには『大橋ラーメン』に匹敵する『紫川』という店があつて、車で二・三度通つた事がある。その存在

に少し不安はあつたものの、記憶をたどりながら駅からの道を歩いて行くと、最近できたらしいモダンなラーメン店のすぐ近くに、工事現場のプレハブ事務所といった感じのその店が昔のままあつた。只、店の裏にできて

いる大きな駐車場が、店の繁盛ぶりを物語っている。まだ十一時過ぎだと言うのに既に五・六人の客が入口に並んでいる。普段の僕なら格好つけて、並んでまで食べさせてもらうという屈辱には耐えられないのであるが、今日は別である。ラーメン店とあつて客の回転は早く、程なく小さなカウンター席に着くこと

が出来た。手書きのメニューは中華そばとライスだけ、ラーメンの大盛りなど無い代わりに、二杯目からは割引となつてるのがおもしろい。若い頃なら二杯注文するのだが……今日はじっくり味わいたい。運ばれてきたやや小ぶりのラーメン鉢に満たされた待望のスープを一口飲んだ瞬間、「この味だ!」と、口いっぱい青春が満ち溢れた。それにしても何故この地にこんなに甘くやさしいラーメンが生まれたのか不思議に思う。初めての播州で仕事に就いた頃の僕は、「あのダボ」「ゴウワクわ」と言つた荒々しい播州弁を耳に

して当惑したものである。ましてや京都育ちの妻をもつてすれば、「播州弁」は正に「蛮州弁」であつたらしい。かような播州弁のイメージとこの甘くやさしいラーメンの味がどうしても結びつかないのである。

懐かしい「播州ラーメン」で身も心も満たされた僕は、旅の締めくくりに姫路に降り立ち、新装なつた天守閣のより一層白く輝く白鷺の勇姿を臉に焼きつけて帰路に就いた。

完

フー

小野村 新

先日の夕刻、県立図書館前の歩道で、ほほえましい光景を目にしました。れんが造りの堀のほとりで、一人の男の子が子猫の頭を撫でさすりながら、何かを話しかけていたのです。

野良猫と少年。二月の夕刻の心あたたまる風景に足は釘付けとなり、しばらくの間見入ってしまったものでした。これまでの私なら、何の感慨も催さずに通り過ぎたことでしょうが。

あの子猫は男の子に拾われ、

家で飼われたのだろうか。それとも、あのまま寒風吹きすさぶ野外に取り残されたのだろうか。野良猫の運命についてまで思いをいたすようになった自分の変わり様は、フーによつてもらされたものなのでした。

フーが我が家にやつて来てから一年半になります。この猫が我が家の一員となるまでには、一悶着あつたのです。猫嫌いの私が飼うことに強く反対したからなのです。幼い頃から動物を飼うような環境で育たなかった私にとつて、一つ屋根の下で動物と住むことなど、考えられも

しないことでした。

この猫は捨て猫らしくて、やんちゃな野良猫にいじめられ、逃げ回っていたとのことでした。他の猫に追いかけて我が家の前まで逃げてきたところを、たまたま長男で小学四年生の良太が見つけ、拾ってきたらしかつたのです。

私が猫が苦手なことを知つて、いる妻は、飼えない理由を話し、こどもたちを納得させようとしたそうですが、次男で小学一年生の洋平が泣いて猫を放さず、妻は説得をあきらめたらしいのです。

こどもに泣かれることほど、

親にとつてつらいことはありません。それに、動物を極端に嫌うのはこどもの教育にもよくないことのように思われてきました。隣近所を見回してみても、犬か猫のいずれかをほとんどの家で飼っています。ここはひとつ、こどもの希望を叶えてやることにしたのでした。

確かによくしつけられたおとなしそうな猫です。妻が言うとおり、どこかの家でつい先日まで飼われていたのでしょう。こどもたちはこの猫に「フー」という名前をつけました。フーという命名の由来については、「おまえの名前は何か? アー、イ

ー、ウー、エー、オー。カー、キー、クー、ケー、コー。サー、シー、スー、セー、ソー。……と声に出して呼びかけていると、『フー』のところで初めて猫が自分を見て、ニャーと鳴いたから、と良太が妻に説明したそうなのですが、はたして真実かどうか。私は皮肉たつぷりに、「風来坊のフーやな」と言つてやりました。

フーはシャムの雌猫で、チョコレートポイントという属名だそうですね。顔、耳、四肢、尾といった端部が黒褐色で、他は灰色を帯びた乳白色をしています。顔は小さく、その割に耳は大きく、尾が長いのも特徴のようです。

シャム猫にしては敏捷性に欠けるので、おばあさんの年齢ではないかと妻は言います。前の家でどれくらいの間飼われていたのでしょうか。フーの定かな年齢は推測するしか他に方法はなかったのです。ともあれ、妻と二人のこともたちは、フーを文字通り猫かわいがりしていました。

反対に、私ひとりがフーから逃げてばかりいました。フーが同じ部屋に居るだけで落ち着かないのです。フーが動けば、反射的に私も動いてしまいます。猫好きの人には理解できないでしょうが、苦手な人間にとって

は、同じ部屋に猫が居るというだけで心おだやかではいられないものなのです。

食事をしているとき、向かいの椅子から私の方を見ているだけで落ち着きません。私がまぐろの刺身など食べていようものなら、それをねらつてこちらに突進しようと身構えるのです。フーの飛びかからんばかりの姿勢に、何度ワツ！ という恐怖の声を発し逃げ腰になったことでしょう。その情けない私のしぐさに妻や子どもたちは大笑いするのですが、私にとってはたまらない、それこそ深刻と形容してもいいような事態なのです。

私はフーを二階に上げないよう頼んでいたのですが、それはどだい無理な相談でした。あのしなやかで力強い跳躍力を持った猫という動物を二階に上げないようにしようと思えば、階段を取り払う他に方法などありません。しかたなく私は、部屋のドアを閉めておくことによつて猫の侵入を防ぐことにしたのです。これで、あの苦手な動物が不意に姿を現し、私を驚かす心配はありません。フーが我が家にやつてきた頃、私はこのようにしてフーから逃げ回っていたのです。

布団の中で眠るのです。なぜこどもたちの部屋で眠らないのかと問うと、猫という動物は、毎日えさを与える人を自分の主人だと思ひなつくだと答えます。いつ寝室に猫が入ってくるか、毎日落ち着かないまま眠っていました。が、そのうち、猫はいつたん妻の布団にもぐり込むと、朝までそこから離れないということが分かりました。

しました。恐れをなしたフーは、電光石火のごとく跳んで階下に逃げ下りてしまいました。朝食時、妻が「今朝のフーちゃんは、あなたに怒鳴られたので、淋しそうにしている」と冗談まじりに言うのです。なるほど、フーは、そば降る雨をガラス戸越しに見つめ、心なしか悲しそうな表情をしています。かわいそうなことをしたと反省させられました。

それにしても、どうして私はこれほど猫が苦手なのでしょう。その理由は「感触」にあります。その理由にやぐにやしたつかみ所のない体。手が肉に埋もれてし

まうような感触には耐えられなく思われました。それと、あの尻尾。私には、あの自在に動く尻尾だけではどうしてもなじめないのです。くると振り返したり、ピヨコンピヨコンと振り上げる――。

長い尻尾の末端までどうして神経が行き届いているのでしょうか。

しかし、不思議なものです。半年を過ぎる頃からフーが傍らにいても大して気にならなくなつてきはじめました。といつても、まだフーを抱っこしてやるどころまではいきません。背中をおさるおさる撫でてやるのが精

いっばいです。

それからどれくらいの日を経た頃だつたでしょうか、私はフーを抱くことができたのです。土曜の夜の晩酌の酔いにまかせてフーをからかつて遊んでいた私は、その日に限つて体をすり寄せ妙になつてくるフーのしぐさにたまらない愛くるしさを覚え、抱き上げてみたくなつたのです。妻やこどもたちが抱く時の要領を頭に描いてみた私は、度胸を決め、フーの両脇を背後から持ち上げ膝の上に置いてやつたのです。(あれほど苦手だつた猫を抱き上げることができた!)その喜びは、確かな手

応えとして残りました。この様子を見ていた妻と二人のこどもたちの表情といたら――。洋平などは、飛び上がらんばかりの驚喜の体でした。

一度抱き上げると、抱くという行為は難なくこなせるようになりました。抱き上げて膝の上に乗せてやると、おとなしくじつとしているの、背中やあごの下を撫でてやつたりします。すると、フーはうつとりと目を細め、満足そうな表情を見せてくれます。

この光景は妻には奇異に映るらしく、フーを膝に置いて背中を撫でている私の手つきを見て、

「ビロードのような肌ざわりでしょ」とからかうように言うのです。なるほど、この感触は悪くはないと思います。

そのうち、フーは私にとつて空気のような存在に変化していきましました。傍らに居ても居なくても大して気にもならなくなつていったのです。存在感は希薄なものとなつたのですが、フーが傍らに居ることを意識すると、明らかに部屋の空気が違つて感じられてくるのです。安らかに眠っているフーと一緒に居ると、静かで平和な時間はこのようにして流れていくのだなあと、感じ入ることがあります。安堵感に

包まれた心おだやかな時間――

先日、落語家の桂文珍があるテレビ番組で、「家で猫を飼い始めた頃は、猫がいやでいやで逃げ回っていたが、現在は猫がかわいくてかわいくて毎晩抱いて寝ている」と話していました。文珍や私のように、異物的存在だった猫という動物が愛すべき存在に変化するという体験をしている人は、けっこう居るのではないのでしょうか。

或る高齢者の日記

高阪博一

本格的に日記を書き出して、もう七年近くになる。働いていた時は、仕事の必要性からスケジュール管理と備忘録を兼ねたものを書いていた。飽くまで実用の範囲に限ったものだ。事実をそのまま書いて、多少の主観を加えたものだ。どちらかといえば、無味乾燥なものの部類だろう。

例えば、『一月十四日(金)／晴れ／十時から会議：来期の販売計画を再検討する。厳しい予想。十％UPは無理だ／十

三時から得意先訪問：値引き要求あり。持ち帰り検討と回答。要求通りにしていたら、今はタダになつている／十六時頃に社長に呼ばれる：GOLFの誘い。この季節は耐寒訓練だと返答し断る／十八時頃退社。今日は伝書鳩。寄り道なし』のように。

こんな具合に一年毎に一冊を使つて書いていた。確か、会社での日記は昭和五十二年から始めた。子供が生まれた年だ。多分、父親の自覚で、仕事をきつちり熟^{コナ}さねば：と思つたのだろう。じつくり見てみると、一日飛んだり、二日飛んだりしてい

る。特に予定のない日や社内で漫然と時間を潰していた日は、日記も書かなかつたのだ。今考えると、この自覚も疑わしいもののように思えてくる。そんな私が、毎日欠ける事なく日記を書き出したのだ。驚くべき事だ。

平成二十年三月末日に、会社を六十歳で定年退職した。「働く気があれば、どうぞ」と言われたが、「結構です」と断つた。帰宅して、女房に「どうするのよ！ 年金は百%じゃないのよ」とこつぴどく怒られた。如何にも行き当たりばつたりであつたと反省しつつも、『覆水盆に返らず』で、今更会社に「雇つてく

ださい」と言いには行けない。

預金通帳を見ると、まああの蓄えがあつた。これなら生活は出来ると確信した。入ってくるお金とそれまでの蓄えの範囲で生活すれば良い。簡単な事だ。問題はないだろう。それより、毎日家に居るという事が楽しくて仕方ないもののように思われた。これが迂闊の典型なのだろう。やつと気付いたのは退職後三か月程してからだつた、何もする事がないのは苦しい事だと。

する事は直ぐに思い浮かばなかつた。そんな時だ。偶々、退職時に持ち帰つたものを整理して

いて、会社で使っていた日記を数冊見つけたのだ。何故、持って帰ってきたのか、はつきり覚えていない。過去を棄てるのが惜しかったのだろうか？

ばらばら捲っていて、無鉄砲にも思ってしまった。「俺は文章が下手だ。書くのに時間がかかる。という事は時間が潰れるという事だ。それに、書いていれば、文章の訓練になるかもしれない。ひよつとして、将来的に、文章が上手くなるかもしれない。いや、きつと上手くなる筈だ。末は、ハルキカリユウノスケ」と。

平成二十年の七月から書き始めた。どう考えても、その年の

半分が済んで、日記を書き出すというのは、中途半端この上ない。これが性格の一つかも知れないのだが、それでも今年でもう七冊目に突入している。机の上には、辞書と一緒に行儀よく七冊とも並んでいる。今、この文章をWORDで書いていると、目の端にちらちらとそれらが入ってくる。まあ、よく書いたものだと思う。

こんな無精で、長続きのしない私が一日も休まず書いたのだ。表彰状ものだ。そんな思いが頭を過ぎると、何を書いているのか無性に読みたくなった。また一方で、書き留めているだけ

の過去を見て何になるのだろうかという思いも、頭の隅に浮かんて来る。過去を愛撫したがる私の性格は、どうも直しようがないようだ。

平成二十年の一冊目に手が伸びた。ばつと開くと、日付は十月二十日だった。この頃は何を書こうか思案したものだ。書き出して四力月目だ。丁度、頭に鉢巻を巻いた赤いタコを感じだつたろう。ひよつとして、頭から白い湯気が立ち上っていたかもしれない。私は当事者なので分からない。一度、女房に聞いてみたいものだ。

それまで、文章らしいものを

書いたといえ、会社での稟議^{リンギ}

書程度だ。形が決まっています、それらしい理由と数字を書けば何とかなる代物だ。書いて、クリップ・ボードに挟んで、提出する。それで完了してしまう。その類いが文章ですかと問われると、答えようがないのだが。

その書類でさえ、思わぬタイミングで突っ返される事がある。見ると赤いチェックが入っている。

百点満点かと馬鹿な事を思いつて、その書類を見ると、『社屋の尾上は老朽化し……』という条^{クダリ}に赤い線だ。むむ、と考える。気付く、『尾上ではなく、屋上だ』と。こんな具合では、書く事の役

に立つ筈がない。

私の勤めていた小さな会社では、テレビでよく見る、居並ぶ役員を前にしてプレゼンをする必要なども更々なかった。仮に必要ながあれば、気の利いた文章の一つも考えていたかもしれない。万に一つの可能性だが、文章が書けるように、ひよつとして、なっていたかもしれない。まったく戯言ではあるのだが。

こんな事を考えながら、その日付の箇所をまじまじと見た。いつものように、小さな字が並んでいる。もう少し上手な文字が書けないものかと、余計な事を思いながら、下手な字を眺めて

驚いた。書いてあるのは、日付と天気と健康状態だけだった。

『十月二十日(月)／快晴／元氣だ。どこも痛くない。が、しかし、やる事がない。時間が長い』と、これだけだった。それ以前を捲つてみても、こんな記述が延々と、百日近く続いている。「結構、忍耐力、あるなあ」と妙に感心してしまった。これでは直ぐに書いてしまおうし、どう考えても、文章の訓練にはならない。さて、この頃どんな事を考えていたのだろう。記憶の頁を手繰ってみる。この歳になると、この頁とやらが、なかなかの曲者だ。重いなんの鉄に鉛を張つたよ

うな代物で、開こうとしても、なかなかそれが出来ない。この頑固な、役立たずと叫んでみても、仕方がない。ああでもない、こうでもないと堂々巡りの繰り返しだ。

文章は短くても、何を書こうか随分考えて、時間を潰していたように思う。だから、少なくとも続けようと考えていた事は事実だ。ここにある七冊がそれを証明している。続けていけば、何とかなると多分考えていたのだろう。平成二十年を閉じて、二十一年に手が伸びた。ぱつと捲ると、十一月三日が目に入った。秋たけなわの文化の日だ。

『十一月三日（火）／曇天。朝は晴れていたのに、昼前から曇り出して、ずっと続いた。／体調は悪くない。痛い所はあるが、歳なのだからと諦めよう。／七月から行き出した夜警のアルバイトがそろそろ半年になる。まだまだ夜は長い。暗闇は怖い』と、こんな感じになっている。書いている量は、前述のものより、少なくとも倍以上になっている。形式は変えずに、量を増やしている。「習うより、慣れよ」で、兎に角、量を書いて、それが習慣になるよう、きつと考えたのだ。と、今見て思っているのだが、この時それを意識していたかど

うか、定かではない。後から見ても、そう思っているだけだ。過去の事は、往々にして、自分に都合良く思い出すものだ。さも、意識的に且つ合理的に、自分自身で実践したと思いがちなものだ。意図せぬ、単なる偶然の結果であつたとしても。

そんな事は別にしても、文章の量が増えているのは事実だ。一年半前と比べれば、進歩と言えなくはない。必要以外に、文章を書かなかつた私が、これだけ出来るようになったのだ。では、時間はどうだったのだろうか。『小銭稼ぎ』のアルバイトに精を出していたのを覚えている。どう

も、最初に考えていた潰し方とは違っていたようだ。

「石の上にも三年」という諺がある。書き出して、三年後の平成二十三年七月頃はどんな書き方になっているのか見たくなった。前の二冊を元に戻し、二十三年の日記を手に取った。七月を開けた。

『平成二十三年七月三十一日（日）／晴れわたる空に、白い入道雲が東の方に見える。蟬の鳴き声が暑さを運んで来る。／夏風邪がぶり返したようだ。くしゃみが出て、咳が出て、鼻がぐずぐずする。まるで、風邪のスリー・カードだ／津波による原発

事故の影響で節電が喧しく言われている。エアコンは出来るだけ点けぬ事だ。高齢者なので、熱中症にも注意が必要だ。水を飲んで、扇風機で風を通し、団扇で扇ぐ事だ。世の中、絶対はない。原発はやめるべきだ。置き換わるものは、きっとある』と、こんな風だ。

一昨年の十一月のものに比べると、やはり、これも倍以上になっている。その上、自分の思いも書いている。読んでいて、「まあまあじゃないか。ハルキは銀河の彼方だけ」と呟いてしまった。

内容がどうこうではない。表現がどうこうでもない。兎に角、

二百字以上は書けているのだ。どうしてなのか、理由は思い付かない。書く事に慣れてきたのが、一番の原因なのだろう。「俺は柿だ、柿だと思っていたけど、桃か栗なんだ」、そう思うと、何故か吹き出してしまった。

二十三年のものを元に戻して、次の年を出そうとした時、ドアをノックする音が耳に入ってきた。ドア越しに、女房の「ご飯よ。早く降りて来てね」という声が聞こえた。手を止めて、ぼんやり、並んでいる日記を見つめた。「日記って、いつたい何なのだろう。端的に言えば、過去の出来事や思いの記録だ。その記録

は、物心両面に亘り、将来に繋がるものでなければならぬ。そうなる、初めて、過去は生き返る。日記が単に過去の愛玩の道具だけなら、書かない方が良いのかも知れない。でも、文章を考える事は、時間潰しになるけれど、そうなる、『小銭稼ぎ』はどうしようかと、取り留めもなく考えてしまった。

深呼吸をして、椅子を引き立ち上ろうとした。何気なく白い壁の方を見ると、カレンダーが目に入った。「師走も、十日。さて、来年の日記はどのようなか。やっぱり、買うぞ」誰に言うともなく、私は多少力んで

声を出していた。

了



〔俳句〕

紅葉降る

彩さい

華はな

紅葉降るはらはらはら鹿苑寺

考えるごと間を置いて散る紅葉

鹿苑寺 落ち葉積もりて血の海に

真如堂の紅葉 瞼に消えぬまま



【阿倍野友之・石川希理対談】

本日のテーマは、描写に説明と公募です

正月 居酒屋にて

石川 おめでとうございます。正月早々済みません。

阿倍野 ああどうも、明けておめでとうございます。

石川 いつもありがとうございます。

阿倍野 どう致しまして。

石川 せめて私が若い女性ならいいのですが、

阿倍野 そうですね。私たちもイケメンならいいのですが。

石川 むかしイケメン（笑）

阿倍野 そういうことにしておきましょうか。ただし、イケメンはイケメンでも…。

石川 あ、イケナイ面のイケメンですね（笑）

阿倍野 前は、会話を上手く使う、ただし会話に頼りすぎてはいけない、というお話でした。

石川 描写を上手く使わないといけない。

阿倍野 たしか、会話は「大変です」で済ませられますし「大変です！」と感嘆詞をつければ説明しなくても判る、けれど描写なら「石川は大きくため息をつき、眼を剥いて『たいへんです』と低い声を飲み込むよう

に」なんて書かないといけない、というお話でした。描写することで作品世界に引き込むことが出来る。登場人物や背景の世界が深くなります。会話だけだとずっと流れてしまう。作品も人物も軽くなってしまうのです。

石川 描写と説明はどう違うのでしょうか。

阿倍野 『新十津川物語』の作者で、亡くなられましたが紫綬褒章を受章された川村たかし先生は「説くな語れ」といわれています。「説く」というのは描写の意味でなく、説明ですね。例えば司馬遼太郎という大作家がおられます。面白いのですが、晩年になってくるともの凄い歴史に関する蘊蓄が作品に大量に書かれてくるケースがありました。この大作家にしてそうですが、知識があるとどうしてもそれを総て書きたくなるものです。物語を説明する最小限の説明に絞るといえるのは難しいですね。つい知っていることを総て書いてしまう。

石川 でも読み手はそういう知識も面白いのでは。

阿倍野 たしかにそれはありますね。読み手には説明がうるさくない方もおられる。ただ、本来小説の話の流れを追っているのに、背景説明が本筋と関係ない部分まで延々と続き出すとうんざりします。素人の方の小説で自己満足に陥っているのは勉強したことが延々と述べられてしまうことです。「調べたこと」「知ったこと」を全部書きたい。時には大学の教科書のようなことになっている。セミプロの学者のようになって知識を披露してしまうのです。だから「よくここまで調べられましたね」と大学の先生から誉められたりすると、「凄いだろう」という気持ちになつてしまいます。「おもしろい」のではないのですね。学術書でも無く小説でも無くということです。

石川 説明するならあくまで読み手が知りたい小説の筋、登場人物を最小限で説明する。

阿倍野 ええそうです。描写というのは具体的にイメージを伴うように対象を描くことですね。それが説明になると。

石川 イメージが無くて知識の羅列になる。

阿倍野 ええ、ですから小説を書かれる方には気をつけて欲しいですね。とくに自分の仕事とか人生を題材にされる場合、どうしてもその自分が生きてきた社会の説明をしたくなる。特殊な社会でも書きすぎてはいけない。自分史でも実はそうなんです。具体的な出来事とか事件を通してその社会を描かないと、まるで説明書になってしまいます。実はエッセイでもそうなんです。踏みこみ方の浅深はありますが。読み手が「ああそうなんだ」「そうかそんなことがあるのか」と具体的に判るように書かないといけない。

石川 わたしは自分史の書き方の講演をするとき、「自慢は書くな失敗を書け」といいます。失敗九に最後成功自慢が、一ならいいんですが。

阿倍野 失敗は具体的なんですね。失敗談です、たいてい具体的で、みんな共感出来る。偉そうにいいますが人生なんて失敗が過半でしょう。なのにそれがないと、まずそれだけで「自慢話だ」ということになります。夫婦仲、病氣、仕事の躓き、親の介護、借金、喧嘩、子どもの反抗、試験の失敗、小さくは買い物間違え、飲み過ぎ食べ過ぎ、不眠、怪我などなど。それがあつて成功や楽しさもある。失敗はいいたくないことですから具体的に書かないと読み手は解らない。また説明であつてもその失敗は読みます。嫌な言葉ですが「人の不幸は蜜の味」っていうでしょう。嫌なことがあつてそれを具体的に書いてありそして苦労してクリアして何かを成し遂げると人は聞くのです。

石川 宮部みゆき・真保裕一といった作家のものも推理小説ですが、ドロドロした人間模様、つまり失敗があつて人を引きつける。それがどう展開して解決していくか、そういうことですね。

阿倍野 説明は最少に、描写の力で物語に引き込む、綺麗事を書かない。そして創造力がないと困ります。「誰でも人生に一度小説を書ける」といいますが、同人誌などでは、自分の仕事と人生の回りをグルグルと書いているだけのケースが多いですね。私小説ですから許されているともいえますが、執拗に同じ事ばかりを書いている。最初は面白かった題材も「またか」となつてしまふ。よほど大胆な切り口が必要です。同時にまったく別の想像世界を書く必要がある。時間軸と空間軸をずらせてみるといいでしょうか。

石川 私など妄想が多いのですが。

阿倍野 「妄想」ですか（笑）

石川 とんでもないことを考えていることがあります。

阿倍野 いいんじゃないですか。本来、物語を作り上げていくというのは、その独特の世界を構築することですから。ただ妄想を読み手が納得するように作り上げるのは難しいですね。小説家はそれが出来るかどうかです。

石川 小説がかけているかどうかという判定はどうすればいいでしょうか。

阿倍野 最終的には、賞を取ることでですね。

石川 なかなか……。

阿倍野 半世紀も前なら、同人誌活動から表舞台にでる方が多かったです。現在は無数といつていいほどの「募集」があります。そちらが主流になりました。地方の場合は同人誌の回り持ち賞みたいなもの

あります。ですので、やはり中央の出版社とか新聞社とかが主催するコンクールがいいでしょうか。公平にシビアに選ばれます。地方でも比較的公平なものもありますが、どうしても人間関係とか、グループ関係とか、地方出版社の関係とかが絡みます。

石川 地方出版社ですか……。

阿倍野 ええ、賞を取らせて自費出版させる、あるいは自分の所から自費出版した物から賞が与えられる。まあお金が絡んできますからねえ。短詩型の短歌や俳句なら、結社に入って十年とかすると、中央の出版社からその結社の名前の付いた叢書の一冊を出したりもできます。

石川 自費出版ですか。

阿倍野 その一形態です。例えば「明星」という結社があつたとすると、そこで十年くらいキャリアを積みますと、「明星叢書 石川希理の世界」「明星叢書 石川希理著エスブラネード」という名前の単行本を、講談社とか小学館とか、旺文社、新潮社、角川書店、中央公論社などという名前で出せるのです。一流出版社から自分の本が出るわけで書き手は満足です。「明星叢書」の一冊ですから、比較的目に付きやすい。一方出版社は自費出版させてそれで利益を得るわけです。持ちつ持たれつですね。地方出版社が同人などに食い込んで本を出させるのも規模の小さい同じ方法です。

石川 『エスブラネード』の出し方は拙いですか。

阿倍野 拙いですね。本当の自費出版。自己満足ですね。すみませんね、厳しいいい方でしょう。

石川 いえ、なんとなくは理解していましたが、「ま、こだわらず」で、続けていきます。

阿倍野 ですから、公募に出されればいいのです。あ、失礼、童話では随分たくさん応募されて、いろいろと

受賞されていますね。

石川　　ありがとうございます。童話が原点で、「書けるのだ、読んでもらえる力があるのだ」と思ったのも童話の入選がきっかけです。ただ、小説の公募は短編でも百枚。まだ書く力があるとは思いません。『エスプラネード』に収められている作品は、二、三十枚。一番長い表題作の「エスプラネード」で七十枚ほどです。

阿倍野　　そうですね。ほとんど百枚が目安ですね。もうそろそろチャレンジされてはどうでしょうか。アクトスでも別冊にすれば、それ以上の枚数でもおさめられると思いますし、どんどん書かれて発表されるべきだと思います。なにせ、創作は人に読んでもらってこそですから。

石川　　賞金もでる。

阿倍野　　まあ、最大のものは一千万とかというものもありますが、競争も何百倍ですね。千倍二千倍というのもある。野球選手やサッカーの選手、また溢れるほどいるタレントなどより作家で食べるというのは大変です。

石川　　プロ作家というのはどれくらいおられるのですか。

阿倍野　　ジャーナリズムのフリーライター、タレントや政治家などのゴーストライターという形を除くと、小説にしろ、童話にしろ、短歌などにしろ、その作品の売り上げだけで食べている人はそれぞれ日本でも十指にものぼらないでしょう。一年に一冊単行本を出して十萬部売れても、印税は数百万。中堅サラリーマンの年収です。毎年十萬部売れる作品を出し続けはなかなかできませんね。著名流行作家になると作品は売れ続けますし、映画になったりします。大学の先生の口も回ってくる。また雑誌にエッセイを書いたり、講演会をしたりで食べています。短歌や俳句は結社があります。会員が万単位ですから、その仕事で十

分に食べられます。また新聞などの選者という仕事も出来る。ただ東京中心ですね。

石川　するとそれ以外で地方の方は？

阿倍野　仕事をもっているかた。また年金生活者、あるいはカルチャースクールの講師。それから地方の新聞や雑誌に食い込んでその選者などになっています。講演会はよほど名前が売れていないと、そう機会がありません。

石川　私は年金生活者です。

阿倍野　だから思うように作品が書けます。(笑)　ただ、中央の公募にだされて修行しないと、自己満足だけの作品になつてしまいます。まあ入選しなくとも、佳作くらい。もつとも佳作も入選といつたりして、特選とか、入賞とか、一席とか、いい方は様々ですが……

石川　中央の賞ですか？

阿倍野　私が危惧するのは、地方の賞などの場合、利益集団化が多いことです。いい地方出版社もあるのですが、やはり儲け至上という所もあります。同人グループの顔が見えますので、賞のたらい回しもあるようです。

石川　あのグループが昨年とつたから、今年は……ということですか。

阿倍野　そうですね。しかも同人グループには止む得ないことです。が、序列もある。またこういう創作をされる方は多いわけで、その指導が商売にもなる。カルチュアーですね。地方の賞を一度取っただけで文化センターなどの講師をされる場合があることです。プロだと錯覚してしまう。こういう方が講師の場合、教えてもらう方の力が伸びません。文章、創作は野球やサッカーなどと違つてはつきりとレベルが判らないので

す。

石川 カルチャーの講師や地方紙・誌の選者も同人グループの回り持ちですか？

阿倍野 そうですね。あるグループに入って何年か経つと、〇〇賞は次はあの人、そして××文化教室の小説の講師は……とたらい回しになる。マスコミなんかも絡んで、中味でなく既得権で賞や仕事という儲け話が与えられるということでしょう。もちろん「そういうけれど芥川賞だって、大手の出版社の回り持ち」という指摘もあります。ただ、最初の新人賞なんかは、編集部と選考委員が、作者を伏せて選ぶわけで、情実が入りにくい。

石川 だから中央の賞ですか。

阿倍野 そうですね。ですからカルチャーなどでお金を払っている方は、自分の先生が、どれくらい、まあ地方の賞にしても何度か、中央の出版社の賞もとられているというふうな経歴を見るべきでしょうね。いいましたとおり、持ち回りで既得権益的に受賞させる賞もあります。先ほどもいいましたが、地方の出版社と結びついて利益集団化している場合もみられます。また、残念な文化現象なのですが、著名な中央の出版社でも3000部出せば利益が出て会社が運営出来ます。公共図書館だけでも3千以上、これに主な大学図書館、小中高の図書館となると万単位です。絵本でも幼稚園だけで8千ほどありますので、3000部は捌けるのです。例えば「小学館の絵本」というとそれが図書館の購入基準になる。公費の場合、中央の出版社が出したというとそれだけで購入の審査基準を満たしてしまう。逆にいうと図書館司書や司書教諭の選書眼を必要としないわけです。そうすると作品の中味より、編集者とのつながりだけで本が出てしまいます。若い女性タレントが事務所の職員と妙なつながりで映画やテレビに登用されるのに似たような嫌な

ケースも見られるようです。

石川 そういふドロドロしたものはともかく、アクトスの合評会はどうでしょうか。

阿倍野 厳しくは、なかなかいいづらいのではありませんか。身近で書いていて人間もよく知っている。もちろん、お互い負けるものかと競い合う場としてはいいことです。そういう場がないとなかなか書きませんしね。ただ、中央の公募なら、第三者のプロが見るわけです。名前も知らない、遠慮する必要はない。

石川 なるほど、同人は修行の場だが、甘いのですね。

阿倍野 顔が見えますからね。ただ、もの凄く厳しい同人集団もあります。しかしそれにしてもやはり古株や、年長者にはいいづらい。だから、甘いのだと認識して、他人の作品を貪欲に読んで、どんどん書く場にしてあげばいいのです。発表の場、締めきりの場ですね。そして質を高める。

石川 それを中央の賞に応募する。

阿倍野 ええ、ただし、同人誌に発表したものは受け付けないという賞が多いですね。だから、何度も書き直し換骨奪胎してまったく新しいものにする。また手持ちの作品はたくさんあるという状況が大切です。一、二作しかないというのは書いていないわけで、まずいいものであるわけではない。

石川 とにかく書けということですね。

阿倍野 そうです。カルチュアール教室でも指導を受けるには先生が、何十作も書いている方であるということが大事ですね。そして様々な賞を取られている。

石川 書いていない人に指導は出来ない。

阿倍野 野球が出来ないのに監督は無理でしょう。何年も練習を続け、上手い選手だからある程度の指

導は出来るのです。もちろん「名選手が必ずしも名監督ではない」というように名指導、すばらしい先生かどうかは判らない。けれど今の文芸創作の現場では、ろくに基礎基本もなく、練習を続けてない、書き続けていない、つまり野球が出来ないのに、一回ヒットを打った方が指導者になつてしまつている現実があります。

石川 その指導を受けると怖いですね。

阿倍野 ええ、伸びないどころか、潰されてしまう。

石川 オソロシイ(笑)

阿倍野 そうです。既得権という病は何処にでもあります。日本はどうも戦後七十年で何処もかしこも、文化でさえ硬直化し閉塞してきている気がします。

石川 話が文明論になりつつあります。

阿倍野 あ、そうですね。話し出すと止まらない。すみません。

石川 いえ、ありがとうございます。どんどん書いて、どんどん中央の賞に応募したいと思います。文明の話はまた機会がありましたら。

阿倍野 ありがとうございます。次は、大きな話をしましょう。(笑)

石川 期待しております。(笑)

文芸集団 Actos2008

- ◆『アクトス誌』年4回発刊
[年会費で各1部を送付。]

文筆活動へのお誘い

- ・作品をネットでお送り下さい。
- ・年12000円の会費以外に発表負担金とか冊子の買い取りなどはありません。
- ・明石市・神戸市・小野市・福岡県・京都府等の会員がいます。



- ◆同人(創作希望)になるには◆

- ①下記宛てにメールなどで申し込んで下さい。→
- ②書類をお送りします。→③書類を返送下さい。

発表人数に限度がありますので運営委員会で検討させていただき、可否を約2ヶ月後までにお返事します。デジタルデータ作成・ネット送付については各自で対応下さい。※ご連絡・書類はアクトス活動以外に使用しません。

- ④入会「可」の方は手続きをして下さい。

- ◆連絡先 〒673-0031 明石市宮の上1-17-614

大西方 アクトス編集室

Tel&Fax 078-922-4562

メール: actos2008@mbe.nifty.com

- ◆HPをご覧ください。掲示板もあります。

<http://actos2008.o.oo7.jp/>(「文芸集団」アクトスで検索)

- ◆詩・短歌・俳句・川柳・随筆・紀行・自分史・小説・評論・童話・4コママンガ・絵・写真など、ジャンルは問いません。

[絵などはjpgなどで掲載します。]

- ◆メール(携帯も可)での作品応募が原則です。無理なときは各自でお友達に依頼されるなどしてください。ペンネームの使用をお勧めします。

- ◆奇数月の第3土曜日、午後16時に西明石で例会があります。

参加は自由です。[懇親会なども持ちます。]

◆ご支援下さい◆

読書会員(支援会員)制度。ご連絡下さい。

[2015年度より配付。年会費は2400円]

※年4冊のアクトス誌と臨時増刊号などをお送り致します。

※懇親会など参加いただけます。またアクトス通信に「おたより」「感想」もお寄せ下さい。

裏表紙の解説(希)

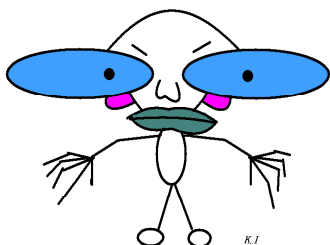
カナダの脳外科医ペンフィールド(1891～1976)は、人間の身体のさまざまな部位の機能が、大脳のどこに対応しているかを表す脳地図を作製しています。それを私なりに乱暴に描き直してみたものです。

眼は原図では大きいのですが、情報を取り入れる感覚器官としてはどの動物も脳の働きの多くの部分を占めていると思います。耳はウサギなどは形状から見ての通り脳の働きの主要なものでしょうか。人間は音そのものより、言語を脳の中で解釈し理解しているし、それを発しているので口(喉と舌)の方が目立つのでしょうか。耳と口で、言語を操っているわけです。犬や鳥の耳は、敵や危険な音を聞き分ける用途が中心でしょうし、吠えたり鳴いたりするものの口は食べ物をとる働きだけの器官です。

耳と口も人間の特徴の一つですがの最大のものは手の指でしょうね。食事から洗顔、着替え、そして仕事の作業と、四六時中働いています。足も起きている間は働いています。が単純作業ですね。しかし手の指は文字を書いたりワープロを打ったり、針に糸を通したりと、これはもう空前絶後の働き者です。

そしてこのような作業の中心は大脳です。言語を操り思考し、相手の意志を推測し、世界を知るといふ脳は人間だけが獲得したものです。

眼・耳・鼻・舌・手足やボディをフルに使って外界を知り感情を起こし、なにより知識を獲得します。なるほど、怒り・嫉妬・食欲・性欲・物欲・名誉欲・自分勝手・自己中心をコントロール出来るのは自分の大脳なのですね。恐るべき人間、恐るべき大脳。



幸せ方程式

大西 隆史

産んでくれた親が違う

生きてきた土地が違う

食べてきた味が違う

付き合ってきた友が違う

教えを受けた先生が違う

働いてきた会社が違う

片方ずつの羽を育てながら大きくなつて

きた

違う違うで埋め尽くされた二人

出合いがあり

楽しさがあり

悲しさがあり

喧嘩があり

仲直りがあり

違う翼をもつ人の肩を、そつと支えなが

ら

恐る恐る羽を動かすのだろう

そうして飛ぶ世界は

一つの視界に収まつて

同じ親を持ち

同じ土地に生き

同じ味を食べ

同じ友を持ち

同じ師を知り

違ふ違ふが交わつて同じ同じになつてい

く

手放すでも奪うでもなく

交わつて溶け合つて広がつて

誰も見たことのないものを作つていくのだ

ろう

自分の決めた幸せなんてものを探し求

めて疲れてしまうより

相手の決めた幸せなんてものに合わせて

疲れてしまうより

貴方となら不幸になつてもいいと

互いに思つていることで

ほんの少し隙間ができて

そこに相手を受け入れて

手放すでも奪うでもなく

交わつて溶け合つて広がつて

時々ふと心が温かくなることを

微笑みだけで分かる二人でありたい

おざきほうさい
尾崎放哉

咳をしても一人

墓のうらに廻る

足のうら洗えば白くなる

肉がやせてくる太い骨である

いれものがない両手でうける

考えごとをしている田螺が歩いている

こんなよい月を一人で見て寝る

一人の道が暮れて来た

春の山のうしろから烟が出だした（辞世）

◆ 1885年 鳥取県生

東京帝大を出てサラリーマン

1924年知恩院寺男

のち神戸市の須磨寺など

1926年小豆島で没41歳

◆ 自由律俳句

種田山頭火と並び称される

※分け入っても 分け入っても

青い山

童話

オレとスライム

石川希理

夜の十時をすぎると、木造アパートのみつしゅうする日ノ出町は、人通りがとどえる。

(やばいなあ)

オレさまは、そう思いながらも、両手で持ったブレボックスUの画面をにらんでいる。足だけが少し速くなった。

「私立の『出来る子中』へゆくんよ」と目を三角にした母親の俊子は夜勤に出ている。しかし十一時ごろに電話をかけてくる。それにでないとビシバシ雷が落ちる。

友だちの敏也は金持ちだ。自分の1Kの部屋がある。ついファイナルドラゴンと一緒にしていたら遅くなってしまった。

秋の星月夜が細い路地を青白くてらてらとなめている。

(ま、半には帰れるやろ)

頭のすみでそう考えながら、ファイナルドラゴンの敵を倒し続けている。四年二組ではいまのところ最高の成績だ。友子などは「成績は最低でゲームは最高のね」と小憎たらしいことをいう。オレさまは事実だからニヤリとするだけだ。

真つ暗な酒屋の角を曲がった。

「ぬ」

オレさまの目のすみが路地の反対にある小さな公園に光りをとらえた。

「なんだ？」

ブレボックスUの画面をにらんでから、顔をあげた。真つ黒な家々の影に囲まれた教室を二つほど合わせた公園は、全体がコバルトブルーに沈んでいる。片隅の小さなブランコとベンチが青白く浮

き上がり、星月夜に照らされた部分の地面は銀灰色だ。

そのベンチの上に透明のグリーン色のものが見える。うつすらと輝いているようだ。

「あらら」

オレさまの目は点になった。

やばいと頭の中で警報が鳴った。わけのわからないものには近づかない方がいい。

「君子危うきに近寄らず」と、敏也の部屋の上に住むじいさまがいつていた。敏也の所は四階建てのマンションである。一階は1Kの部屋が十もあり、そのうち一つが敏也の部屋だ。二階に敏也のじいさまとばあさんがいる。四階は全フロアーが両親のいる自宅だ。あとは貸部屋になっている。

じいさまは元高校の漢文の先生らしい。ときおり、敏也の所に突然来ては、ひとこと説教をたれたまう。でも面白いので、オレさまも敏也も大好きだ。

「そう、君子だ。君子、危うきにだ」

オレさまは口の中でもぞもぞいつて、ブレボックスUに視線を落とすと、足を速めた。

「まってよ」

高い、可愛らしい声がした。

少しギョツとしたが、声が胸きゅんみたいだったのでオレさまは立ちどまった。

ベンチの上の透明のグリーン色のものがギンと輝いている。

「な、なんや？　だ、だれや？」

オレさまはゴクンとつばを飲んだ。

ベンチの上の枕くらいの大きさのものがピョンと飛び上がった。

「や、やばい！」

オレさまは逃げ出そうとした。

「こわくないよ！　まってよ！」

また可愛い声がした。AKB48のあの娘^こみたいた。

「だれだ、おまえ！」

オレさまは半分逃げ出す態勢のまま、小さな公園に踏みこんで、ベンチをのぞいた。

「あ」

なんとベンチの上に緑色のスライムがいた。

くりのような形をして、ポニャポニャしたファイナルドラゴンに出てくるゼリー状の怪物だ。大きな目玉が二つあって、オレさまをじつと見ている。赤い唇がくじけと動いた。

「ぼくちゃん、スライム」

「あんぐり、もんぐり！」

オレさまは四年二組で、はやらせた言葉を吐きだした。

「ゲッ！」

スライムの透明な緑色が少し赤味を帯びて、身体がぷるんと震えた。

オレさまは小さなベンチの側まで近づいた。可愛らしいスライムだ。スライムはファイナルドラゴ

ンに出てくる一番下つ端の怪物である。中にはメタルスライムなんてやたらと強いものもいるが、目の前のゼリーみたいなスライムは弱い。

「夢か？」

オレさまはブレボックスUを左手に持つて、右手でほつべたをギョツとつねった。

「い、いてー！」

飛び上がるほどほつべたがねじれた。

「あほか！」

突然スライムの言葉が太くなって、可愛い子どもがおつさんのような低い声になった。同時に、全体が真っ赤になった。

「なんだ……」

オレさまは目の前のスライムを口を開けて見ている。ゲームの中のスライムが、夜中の日ノ出町の公園にいるわけではない。

ぼんやりしている間にスライムは真っ赤な炎のように燃えだした。少し大きくなったと感じたら、

スライムの身体がギュッと縮んだ。目は端のあがつた逆三角形になり、暗緑色の目玉の中が血走ったようだ。大きな口はニヤリとねじれている。

「え……」

縮んだスライムの身体がグンと伸びたかと思うと、オレさまめがけてぶつかってきた。

「あ、くそ」

オレさまは、上半身をねじりながら、左手に持ったプレボックスUをスライムにぶつけようとした。瞬間、それが高いものだど気がついた。価格コムで買ったつて二万五千円もする。母親の俊子が夜勤に出ても四日分のお金だ。オレさまはプレボックスUを両手で胸に抱えたまま、左足を軸に、右足をぐるりと回転させてスライムめがけて思い切りぶつけた。

「ズッ」

スライムの呻き声でした。

「ズ、ず、ズ、ズラ、ずらいむ、イム」

ぶつ切りの声がして、スライムはぼてんとベンチの上に墜ちた。

火の玉色は濃いルビーレッドから、明るいローズ色になり、コーラルレッドになって、パッとグリーンに変わり最後に明るいミントグリーンになった。そして、大きくなった身体は、元の枕くらいになり、さらに縮んでソフトボールくらいになった。

「ごめんなさい。ぼ、ぼくちゃん、わるぎはなかつたんでちゅ。あ、あなたがよわいとおもったちゅ」

「なに！」

オレさまは弱いといわれたのでムツときた。また、プレボックスUを振り上げて、慌ててやめた。なにせ、今年のお年玉と、誕生日いとこの前の国語の試験で六十五点を取ったので、そのお祝いで買ってもらったのだ。もつとも試験は敏也のものをカンニングした。

（敏也のやつ、金持ちのくせに今回は頭が悪い。いつもは九十点以上ばかり取るのに）

よけいなことを思いだしたが、二万五千円はオレさまの家の家計では…。

計算しだしてやめた。とにかく母親の俊子によると給料は一ヶ月十五万円である。そこから文化住宅長屋の家賃を四万五千円も払うのだそう。

オレさまがプレボックスUを下けたので、スライムは上目づかいにオレさまを見て、作り笑いをした。

スライムの目の玉はまん丸に戻っている。

「おまえ、ゲームのスライム？」

「そうでちゅ」

「なにがそうでちゅや、襲いかかつてきたやろ」

「はいでちゅ」

「オレさまをどうするつもりやったんや」

「それが…、とにかくよわいやつにはおそいかかるのがきまりなんでちゅ」

「あらら…」

オレさまは考え込んだ。ときどき、オレさまも敏也をいじめることがある。ちよつと違う気がしたがよくわからなかった。

しかしゲームの中のスライムが本当にいるなんて、オレさまは何度も目をばちくりとした。

「あの…」

スライムも涼しげな目をばちくりさせた。「わたちゅをけらいにしてちゅださい」

「は」

オレさまはスライムをきつと見た。ソフトボールくらいある。家来は悪くないが、こんなのについて回られると困る。

「あ、まだちいさくなれますでちゅ」

スライムがそういうと、たちまち身体が縮んで、ビー玉くらいになった。透き通るような薄い水色になっている。

「よ、よし」

オレさまはそつと指先でつまみ上げた。柔らか

いグミみたいな感じがした。

「あ、たべないでくだちやい。おなかをこわしまちゅ」

オレさまは慌てて、胸ポケットにスライムを入れると、家に急いだ。

日ノ出町の日ノ出荘は木造文化長屋のアパートである。下に五部屋、上に五部屋あつて、オレさまの邸宅は二階東の端。入り口のドアを開けると半畳ほどの三和土^{たつき}の玄関。そこが台所兼食堂の四畳半の板の間。右手にトイレがある。部屋^{ぶつ}の奥は三畳の和室。窓も何もないから、もの入れみただ。その奥に小さな廊下を挟んで襖の入り口のある六畳の和室が二つ。右手の外に面した所がオレさまの部屋だ。隣の母親の俊子の部屋とは土壁でくぎられている。風呂？ それは日ノ出荘の前にある合同風呂である。

少し遅くなつたが俊子からの電話はまだのようだった。オレさまは電気ポットで湯を沸かすと、

チキンでなくキッチンラーメンを丼に入れて、たまごを落とした。それからスライムをつまみ出した。

「おい、スライム」

「なんでちゅか、わたくしなまえがありまちゅ」

「あ、そ」

「スライムスライムでちゅ」

「なんやそれ」

「スライムのなかのスライムというなまえでちゅ」

「ま、ええけど、おまえ食べる？ キッチンラーメン」

「たべまちえん」

「なに食べてんの」

「いじめエネルギー」

「あ、それで」

オレさまは瞬間に理解した。こいつらはいじめた相手が怒つたり悲しんだりしたときのエネルギーを食べているのだ。

「悪いやつちや」

「でもないでちゅ」

話を聞いてみると、自分がいじめた相手のエネルギーもだが、世の中のいじめのエネルギーも食べる。だから結果的に世界中の悲しみや怒りが減っているという。怒りや悲しみは人の心に伝染するらしい。

「でもなあ、怒りが減るのはええけど…、悲しみは」

「ええことにきがつきまちゆね」

悲しみは哀しみや愛しみかなにも通じて、人の心に優しさや慈しみを生まれさせるのだ。

「あんさん」

「あんさんやない、オレさまは龍一」

「あ、りゆういちちやま、おもったほどバカちゃうのでちゆね」

「な、なに、バ、バカ」

オレさまはスライムを机の引き出しにほりこんだ。

キュツという声が出た。

それからラーメンを食べた。十一時になったのに俊子から電話がない。少し嫌な予感がしたが、明日も学校なので風呂に入った。

日ノ出荘の前に風呂小屋がある。ここに、名前を書いたかまぼこ板の札をかけて中で脱衣して、風呂に入る。大きさは家庭風呂より少し大きい。あがるときに細い目の垢すくいで、湯をきれいにしてふたをする。外に出てかまぼこ板を外すが、次のものがかかっていたらその家に連絡する。たいていオレさまが最後だ。朝は十時から夜中は十二時までときまつている。風呂掃除は順に回ってくる。

部屋に戻って引き出しをのぞくと、スライムが寝ていた。小さな寝息が聞こえて、口の端からよだれがたれていた。小指の先でよだれをふいてやった。

俊子は朝方帰ってくる。オレさまは今夜はゲームをあきらめて、布団にもぐりこんだ。

朝、目が覚めて、引き出しをのぞくと、スライムはいなかった。どうして出たのか知らない。家来になるようなことをいつていたけれど、ま、仕方ない。

着替えて台所に行くと目が点になった。

「す、すすす、スライム！ お、お、おかかか、母ちゃん」

いつの間にかスライムはぎらぎら光る逆三角形の目になっている。そして大きなクッションくらいになつて、俊子の背中に乗つかつている。

「こ、このやろー！」

殴りかかろうとしたら、あつという間に元のピ―玉に戻つて、ピョンピョンはねながらオレさまの部屋に戻つていった。

俊子は食卓と食器棚の間に目を回して突つ伏している。

「だ、だだ、大丈夫？」

オレさまは慌てて俊子を起こした。怪我はしていないらしい。

「龍一！ あなたなにを持ち込んだの！」

目が血走つていた。

「いや、あのその、へどもど」

「なにいつてるの！」

「あんぐり、もんぐり、びつくり！」

俊子の手があがつた。やばい、ビシバシ雷だ。往復ビンタに説教の十連発である。

「ご、ごご、ごごかい、いや、午前かいでなくて、ごかいや」

目をギュツとつむつたらビシバシ雷は落ちてこなかつた。

いくらなんでも大きなクッションくらいのスライムが現れるわけはないと俊子は考えたのだ。自分がなにかで目を回したに違いない。きづかつてくれる息子の龍一を怒るのは筋違いだと気がついたのであろう。

「でもね」

俊子はニヤリと笑つてギロリと目を光らせた。

昨夜は早い目に家に電話して、そのときに龍一
が出なかったという。

「夜遊びはいい加減にしなさい」

気味悪いくらいに優しく俊子はオレさまを諭
した。

安売りスーパーアイマルの芳醇パンは六枚七
十八円である。それにピーナツバターを塗って、牛
乳とヨーグルト、果物はバナナ。朝ご飯を食べてオ
レさまが学校に行くと、俊子は掃除洗濯をして、
ときには晚ご飯の用意をしてから眠る。午後の三
時すぎには仕事に出かける。

食事のあと、オレさまは部屋の机をのぞいた。

「ご、ごめんなちゃい」

スライムはそういつてオレさまのポケットに飛び
込んできた。

どうも朝、俊子を見たら弱そうなので、大きく
膨れたらしい。相手が弱そうだといいめたくなる
という。

「うまれつきのせいかくでちゅ」

「おまえな」

オレさまは敏也のじいさまの言葉を思いだし
た。

じいさまは「まごじい」と呼ばれている。敏也が
自治会の集会に行つて「おじいちゃん」と呼んだら
全員が振り返つたので、それかららしい。そのまご
じいがいったことを繰り返した。

「性格はな、直るんやぞ」

「まぢやか」

「まぢやかやない。この宇宙で…」

オレさまはまごじいの口ぐせでも、ちよつと話が
大きすぎるなあと思いつつ続けた。「変わらないも
のはない。これを諸行無常という、えへん、おほん、
ごほん」

「しよぎよぎようむぎようでちゅか」

「ま、そうともいう。で、悪い性格を変えるには、ス
ライムにとつていいことか、オレさまにとつていいこ

とか、敏也にとつていいことを考えて動く」

「なんのことでちゆか」

「あのな、人をおどかすのはスライムにとつていいことでも、オレさまには悪いことだ。だから人をおどかさない。そうしていると性格が直つてくる」

「はてて」

「なにがはててや。むつかしくいうとやな」

オレさまは脳みそを絞りだして、まごじいの言葉进行い出した。

「自分にとつていいことか、相手にとつていいことか、社会にとつていいことか、の三つをクリアしたら行動に移す」

「すごいでちゆ」

「わかつたか」

オレさまの鼻の頭が五ミリほど高くなった。

「たとえば、オレさまはトイレの大きいのは敏也の所です。あそこは勝手にふたが開いて、音が流れて、お尻を洗って、乾燥までしてくれる。このト

イレは、寒くて冷たくて臭い。学校のトイレはもう地獄だ。敏也の所ならば自分にとつていいことだ。敏也は友だちが来てくれるのでいいことだ。まごじいは自慢ができるのでいいことだ。人が幸せになるのは社会にとつていいことだ」

スライムの大きな目が、黒い小さな点になつたのでオレさまは演説をやめた。ちよつと違うようだ。

「でも、いいことをききまちゆた。みんなにおしえたいでちゆ」

スライムはピョンとはねた。

登校した。

学校の踊り場で敏也が「へーっ」といった。

オレさまも「へーっ」と応えた。

スライムを見せたら、あまり驚かなかつた。

「おまえなんで驚かへんのん」

「まごじいの所にもスライムがいる」

敏也がいった。

それでその日も敏也の所に行つた。今日は早く帰らないと具合が悪い。昨日遅くなつたことが俊子にばれているから、必ず早い時間に電話してくるはずだ。オレさまは敏也の部屋にランドセルを置いてブレボックスUだけ持って上に行つた。まごじいの所へ行つたことは何度かあるが、スライムがいるというので少し緊張していた。

敏也のマンシヨンの二階のまごじいの部屋は広い。LDKだつて三十畳くらいある。書斎も二十畳くらいあつて、大きな机にディスプレイにパソコン、ファックスにプリンタ、もの凄い量の本、簡易ベッド、工作台、小さな調理台に冷蔵庫まである。

「いらつしやい」

短いあごヒゲをこすりながらいう。ほとんど一日まごじいはここにいます。何か書いたり、本を読んだり、作業台にいたりする。あとはときおり散歩する姿を見る。六十七歳だというけれど元氣はつらつとしてゐる。

出してくれた清涼飲料水「天然知能水」をまずは一口飲んだ。まごじいお手製で、グルコサミンとコエンザイムとビルベリーとコンドロイチンと、亜鉛、鉄、葉酸、カルシウムビタミンBとCとE、乳酸菌とまあいろいろ入っているらしい。

オレさまがゲップを出していると、「スライムが見たいつて」と敏也がいってくれた。

「ほう」

まごじいの目がギラリと光つた。後頭部が薄く、染めた髪の毛も透けているくせに長髪である。オレさまはスライムをポケットから出した。するとスライムが飛び上がって跳ね回りだした。

「おーい、みんなでてきてよー」

スライムは少し大きくなって叫びだした。

まごじいはまったく驚かない。

床の上で踊っているスライムを見ていたオレさまの目玉が飛び出た。

「あ」という言葉が凍りついてゴトンと床の上に落

ちた。

本箱のすき間から、スライムが何匹か出てきた。それだけではなかった。よこの棚の工具箱から、真つ黒くろすけという、「となりのトトロ」に出てくるやつが数匹現れた。オレさまの顔の前をブンとなにかが飛んだ。みるとテレビの宣伝で見たザックだった。床のフローリングからアメンバーが二匹出てきて盛り上がった。

「なんだ」という言葉が、「な」と「んだ」でポキリと折れて、粉みたいになつて消えた。

「まごじいはねえ、ときどきいろんな世界に出かけて、いろんなものを連れて帰ってくるんだ。ときには勝手に付いてくるものもある」

敏也がいつて両手を手のひらを上にしてあげて、首をすくめて見せた。

「まあ、これで龍一くんもお仲間じゃな」

まごじいが白い歯を見せた。

スライムもくろすけも、ザックもアメンバーも

本当はこの世界にもたくさんいて、あるきまつた人たちだけに見えるらしい。

「ヒーローや、ヒーローだけに見えるんや」

オレさまはうわずつた声を出した。

「いや、ヘンタイにだけ見える」

まごじいがボソリといった。

オレさまの声が空中で粉々になり、バラバラと落ちてきた。それをくろすけとアメンバーが食べている。

「た、食べるな！」

オレさまは思わず叫んでから、頭をかいだ。

ま、声の粉々になつたものなど、この宇宙でもここだけにしかないだろうし、それを食べるものも珍しに違いない。

「こいつらここに住んでいるのか」

オレさまはプレボックスUを工作台の上に置いた。

「いや、そこに住んどるなあ」

まごじいが指さした。

指の先にはプレボックスUしかない。

「ブブ、ブ」

オレさまが慌ててプレボックスUを指した。

「そう、ブブ、ブじゃ」

まごじいはそれを受けていうと、腕をぐるりと回して、机の上の三十インチもあるパソコン用ディスプレイを指さした。

「あそこ、あそこ、あそこにもなあ」

パソコンと家庭用ゲーム機WPXと五十インチのテレビである。

「あれつて……」

「そうじゃゲームの中、テレビの中、デジタルの世界」

「そんな」

「バナナ」

よこから敏也が続けた。

デジタルだつて、電子だつて、この宇宙の一部、そこで生まれたものはそこで生きて死んでいく。ただ人間には普通、それがわからないだけなのだ。

「認識できないんだな」

敏也がむつかしいことをいった。

「へ、へんたいでちゅ」

スライムが床からオレさまを見てにこりとした。

了

風詠社文庫

一本50,000円

天然知能水

石川希理自選集

平成26年7月7日 風詠社発行 648円＋税

ISBN 978-4-434-19464-1 C0093

お近くの書店からご注文下さい。

※ネットの「アマゾン」・「紀伊國屋」・「7ネット」などでも入手可。

収録作選評(抄)

「そばづえ」

メルヘンとしては珍しいS・Fタッチのもので、星新一の系統に属するものです。このまま、短篇漫画のストーリーになりそうですが、人間の未来を予見するようなどころもあり、まだぼくらはいろいろな意味で「そばづえ」をくうことが多いので、身につまされる現実感がある。

漫画家 やなせ・たかし

「ゴックン博士の大発明」

ゴックン博士の大発明は、発想のユニークさ、リズム感のある文章、人物のおもしろさでぐいぐいひっぱられました。

児童文学作家 高浜直子

「星月夜はくるまの日」

童話は一篇一編が一つの小世界です。どこにもない、作者によって創作された世界の楽しさが、童話の中には溢れています。その小世界をすぐれた「小世界」とするのは主人公のキャラクターの魅力と、ストーリーの生き生きした展開です。文章力も重要なことは言うまでもありません。印象的な場面のいくつかも、なくてはならないものです。「星月夜はくるまの日」は、それらの要素を備えていて、小気味よい短いセンテンスで構成され、発想の面白さと相まって、成功しています。ネコのやや乱暴なものの言い方が非常に効果的でした。

兵庫女子短期大学教授 川口志保子

■受贈誌の紹介

●ご惠贈ありがとうございました。

●アクトス会員の皆さまには、閲覧希望がありましたら編集室までご連絡下さい。

①『八月の群れ』VOL.59 二〇一四年十月発行

②『淡路島文学』第10号記念号 二〇一四年十月発行

◆アクトス組織 ・会員 同人 9名 読暑会員 10名

・代表 大西亥一郎

・副代表 瓜生八頼子

・編集委員

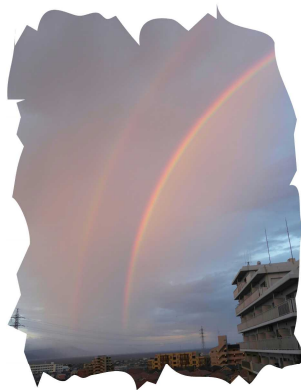
高阪博一

塩見伸介

※代表、副代表は編集委員を兼ねる。また編集委員四名で運営委員会を構成する。

※「通信」でもお知らせしましたが、とりあえずの組織です。規約などはありません。例会の場で色々と話し合い進めていきたいと思います。ご意見などありましたら遠慮なくお寄せ下さい。

◆右は8月に出た虹。二重の虹は初めて目にした。思わず写真機を取りに走った。





◆ 中高年齢労働者福祉センター
(サンライフ明石)

〒673-0041 明石市西明石南町3丁目1-21

電話078-923-0770

- ◆ 合評会(例会)は、中高年齢労働者福祉センター(サンライフ明石)(上図・所在、連絡先)です。奇数月・第3土曜日、1時半からの予定です。改めてご連絡しませんので、参加される場合は手帖などにお控え下さい。
- 出欠のご連絡は不要です。

編集室から

◆次号(第26号)の原稿締切は2月末日必着です。

◆3月例会は21日(土)です。

◆第3土曜です。13時半から2時間半程度です。

◆5月例会は16日(土)です。

◆例会後、参加可能の方があれば懇親会をする予定です。

◆HPに、25号までを、PDFファイルで掲載しました。URLは次のとおりです。

<http://actos2008.o.oo7.jp/>

(ネット検索の窓から「文芸□アクトス」といれて探されても出てきません。□はスペース)

◆11月にでました臨時増刊号『校長

失格』は送料込みで九百八十円の頒価です。ご希望の方はご連絡下さい。冊子到着後同封しました振替用紙で頒価をおおさめ下さい。

◆26号からは平成27年度に入りまして、会費は2月末までに同封の振込用紙でお納め下さい。会費の未納をもつて退会といたします。

◆ご注意ー落とし込み・編集・製本と時間がかかりますので、原稿締めきりを一ヶ月ずつはやめます。3・6・9・12月が2・5・8・11月末となります。間隔は同じですが今回ののみ、ひと月早くなりますので留意下さい。各号の発行日は同じです。

◆予算は年4回各号4万(製本印刷及び送付費用)・計16万円の支出です。臨時の増刊号は著者負担です。※昨年度は同人9名分10万8

千円と読書会員10名分3万2千円、計14万円の収入でした。※例会は会場費1回千二百円と必要な場合冷暖房費300円、及び茶菓代です。例会に参加された場合500円をいただいています。余つた場合はアクトス会計に組み込みます。

◆2月末に納入頂いた会費は途中退会などでも返金しません。また途中入会でも全額必要です。

◆表紙は棟近喜忠氏の若き日の自画像。鏡を見て書かれたそうです。「スマートでした」とコメントがありました。裏表紙カットは石川希理の作。カットは「ぎよつ!」とされたかもしれません。人間の脳の機能が何処に主に使われているか想像したものです。科学的ではありません。説明は本文中にあります。

■入会下さい。ネットで参加可能です。

◆入会するには - 40頁をご覧下さい◆

①会費1年分(12,000円)を下の振込先に振り込み

②〒住所・氏名(フリガナ)・生年月日・職業・電話・
メールを明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可

〒673-0031 明石市宮の上1の17の614

大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

※読書会員の場合 年会費は2,400円です。

※会員・読書会員とも年4回、各1冊お届けします。(送料含む)

◆会費等振込先(郵便・当座)◆

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※会費以外に発表負担金などは不要です。

アクトス 第25号

第7巻第1号・通巻第30号

発行 平成二十七年二月一日

編集 大西亥一郎

発行所

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品(頒価)800円